Vol.64-No.04　　2012 年 11 月

阿佐ヶ谷教会

信友会 会報

9 月例会 (9 月 23 日開催) 報告

「使徒言行録の学び」(第 5 回)　大宮 チエ子 先生

―新約聖書　使徒言行録　第 5 章―

11 月に入り、気候が一気に変わってきました。今年は長く暑い夏がいつまでも続いたせいか、秋の到来を感じないうちに冬の声がすぐそこに聞こえて来てしまっている様です。これからの厳しい寒さに備え、体調を崩さぬ様、どうぞご自愛ください。

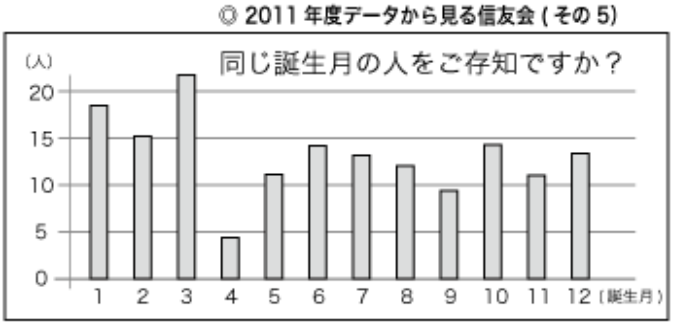
さて 9 月 23 日に行われた信友会 9 月例会では、今年度から学び始めた使徒言行録の第 5 章について、大宮チエ子名誉牧師に講解していただきました。復活後のイエスによる 40 日間の教育、聖霊降臨により力を受けた使徒たちによる、力強い伝道の姿を丁寧に解説していただきました。

「聖霊行伝をたどる－使徒言行録の学び－第 5 章―」　大宮チエ子先生

使徒言行録は、2 世紀後半に認められて使徒言行録と名付けられたと言われ、パウロの書簡も同じ頃に書簡集として確立されたと言われています。使徒言行録は使徒たちが語り継がれたものですが、これは教会形成の物語であり、使徒たちが関わった「教会の福音宣教」の歴史であります。使徒言行録冒頭では、イエスが受難の後に復活し、ご自分が生きていることを数多くの証拠を持って使徒たちに示し、40 日間弟子たちと生活を共にして神の国のことを教え、「エルサレムを離れず、前に私から聞いた、父の約束されたものを待ちなさい。ヨハネは水で洗礼を授けたが、あなた方は間もなく聖霊による洗礼を授けられるからである」と言われました。使徒言行録はここから始まる使徒たちの伝道の歴史です。

(次ページへ)

◎ 2011 年度データから見る信友会 (その 5)



誕生月には例会にもご参加ください。

信友会会員は
156 人です (2011 年)

（前ページより）

アナニアとサフィラ

第５章では、三つのエピソードが書かれています。最初の小見出しは、アナニアとサフィラです。

第４章の 32 節以下には、信徒たちが心を１つにし、持ち物を自分のものだと言う者は無く、全てを共有して生活し、誰も貧しい人はいなかったと書かれています。これはいわゆるキリスト教的共産制といわれ、信徒が熱心に共に生きる生活を目指していたことを表わしています。

第５章では、アナニアとサフィラ夫妻は自分の土地を売り払ったのですが、アナニアが妻も承知の上で代金をごまかし、その一部を使徒たちの足元に差し出したために、ペトロから叱責されます。

「アナニア、なぜサタンに心を奪われ、聖霊を欺いて土地の代金をごまかしたのか、売らなければ自分のものだし、売っても自分の自由に使える。どうしてそんな気になったのか。あなたは、人を欺いたのでなく神を欺いたのだ。」この言葉を聞いてアナニアは、倒れて息を引き取り葬られました。３時間後に、サフィラはこの事態を何も知らずに現れました。ペトロが売った土地の値段を確かめた時、サフィラもアナニアと同じ答えをしたので、ペトロから２人で示し合わせて主の霊を試すとはと糾弾され、その場に倒れて息を引き取っています。全額を出せとは誰も言っていないのであり、彼等２人が差し出した額は小さくないものであったと思いますが。２人で共謀して値段をごまかした行為は、人ばかりでなく神を欺いたことになり、赦されるものではなかったのです。11 節では、この恐るべき裁きによる２人の死を見た教会の人たちは非常に恐れたと書かれています。この裁きを恐れるということは、厳しい裁きへの驚愕でなく、神の業に対する畏敬の念であったと思われます。

わたしたちが神に捧げる献金、奉仕活動などの教会における働き、隣人に対する愛の業について反省させられることの多い記事ではないでしょうか。

使徒たち、多くの奇跡を行う

12 節からは、使徒たちが多くの奇跡を行ったことが書かれています。使徒たちによって多くのしるしや不思議な業が民衆の間で行われました。一同、心を一つにしてソロモンの回廊に集まっていましたが、そこにいる他の者は遠巻きにして仲間に加わりませんでした。しかし民衆は、使徒たちの奇跡の業を称賛して、多くの男女が主を信じ教会の群れに加わり、その数はますます増えていきました。

また人々は、多くの病人たちをつれて集まって来ました。使徒たちを通して働く神の力によって病人を癒してもらうためです。人々は、病人を大通りに運び出して、担架や床に寝かせて、ペトロが通りかかるとき、せめてその影だけでも病人に当たることを願いました。エルサレムやその周辺からも群集が病人や穢れた霊に悩まされている人々を連れて集まり、一人残らず癒されたと書かれています。

40 日間共に住んで復活のイエスの教育を受け、五旬節の日の聖霊降臨により力を得た使徒たちは民衆の中で主の復活の証しや奇跡を行い、厳しい弾圧の中でも主の復活を証しする生活を続けました。聖霊に満たされた使徒たちの力強い伝道により、教会では主を信じる信徒がどんどん増えていきました。

使徒たちに対する迫害

17 節からは使徒たちに対する迫害について書かれています。使徒たちが奇跡やしるしにより民衆をひきつけた行為をみて、大祭司やサドカイ派の人々は、妬みに燃えて使徒たちを投獄します。神に仕え、愛と恵みを伝えるべき人たちが妬みに燃えたのです。4 章でもペトロとヨハネは取り調べを受けていますが、「あの名によっては誰にも話すな」との脅しに屈しませんでした。5 章 17 節以下では使徒たちに対する迫害は更に激しくなっていきます。サドカイ派は、パリサイ派、エッセネ派と共にユダヤ教の 3 大教派の一つで、ユダヤ教の教理に最も忠実で多くの大祭司を出す教派です。彼らは使徒たちを自分たちの活動を妨げるものと見做しています。本来イエスを救世主として歓迎しなければならない立場にありながら、使徒たちに対する民衆の人気を妬み、その活動を妨害していたのです。

パリサイ派は、分離するという意味で、儀式を尊重し神に仕える聖なる働きをする者で、他の人とは区別されていると考え、「分離する人」と呼ばれました。彼らは宗教者でありながら、妬みに燃えた迫害者の側に立ったのです。21 節では、天使が夜中に使徒たちを牢から解放し、「行って神殿の境内でこの命の言葉を残らず民衆に告げなさい」と言います。使徒たちは夜明けに境内に入って教え始めます。使徒たちがいかに神さまを伝えることに燃えていたかが伺えます。伝道への熱い思いが伝わってきます。

一方、大祭司たちは、最高法院を開いて使徒たちを呼び入れようとしましたが、牢には誰もいません。牢番や下役は番兵をつけていたのにと戸惑います。その時人が来て、使徒たちが境内で民衆に教えていることを伝えます。使徒たちは逃げるために牢を出たのではなく伝道するため、命を守ることより、神の言葉を伝えるために出たのです。守衛長は下役を連れて再び使徒たちを連れ戻しますが、民衆の反抗を恐れて、手荒なことはしなかったといいます。

28 節では、大祭司が「あの名によって教えてはならないと厳しく命じたのに、あの男の血を流した責任を我々に負わせている。」と糾弾します。それに対してペテロや他の使徒たちは、「人間に従うよりも神に従わなければならない。わたしたちの先祖の神は、あなた方が木につけて殺したイエスを復活させられた。神はイスラエルを悔い改めさせ、その罪を赦すために、この方を導き手とし、救い主として、ご自分の右に上げられました。わたしたちはこの事実の証人であり、また、神がご自分に従う人々にお与えになった聖霊も、このことを証ししています」と確信を持って答えます。

これを聞いた人たちは激しく怒り、使徒たちを殺そうとしましたが、民衆から尊敬されているファリサイ派を代表するラビ、ガマリエルが立って、使徒たちを退出させてから一同に言います。ガマリエルは、若き日のサウロ（後のパウロ）にユダヤ教と律法を教えた指導者です。「イスラエルの人たち、あの者たちの取り扱いに注意しなさい。かつてのテウダやガリラヤのヨハネの暴動の時には、首謀者が殺されると、従った集団はみな散りじりになって跡形も無くなりました。しかし、今はあの者たちから手を引きなさい。ほうっておくが良い。あの計画や行動が人間から出たものなら自滅するだろうし、神から出たものならば、彼らを滅ぼすことは出来ない。

（次ページへ）

（前ページより）

もしかすると、諸君は神に逆らう者になるかも知れないのだ」。一同は、ガマリエルの意見に従い、使徒たちを呼び戻して、鞭で打ってから「イエスの名によって話してはならない」と命じて釈放しました。

使徒たちは、イエスの名のために辱めを受けるほどの者になったことを喜び、最高法院から出て行き、毎日神殿の境内や家々で絶えず教え、メシア・イエスについて福音を告げ知らせていました。

彼らは、迫害を受けても後ずさりすることもなく。福音を喜びとして、これを語ることを使命と感じていました。信仰の確かさ、神に従う思いの強さを知らされる記事です。最高法院の命令を恐れてやめるどころか、臆することなく伝道に邁進する、初代教会の信仰の深さに感銘を受けます。

（文責：玉澤武之　写真：小笠原敦久、レイアウト：小野淳二）